

昭和43年7月1日第3種郵便物認可  
平成21年4月5日発行(毎月5日1回発行)  
第49巻4月号(通巻567号)

# 風土



4

利休忌  
神蔵器

ことだまのさきはふ国ぞ山笑ふ  
てのひらに三月の月したたれり  
霜柱 不断念仏湧き起こる  
利休忌や白佗助のおちよぼ咲き  
神よりの一語一語や露の臺

黄 梅 や 三<sup>た</sup>和<sup>た</sup>土<sup>き</sup>の 土 を 削 り 取 り  
蛇 出 で て 桂 郎 の 眼 に つ き 当 り  
田 の 中 に 巖 一 つ あ り 牛 鋤 け り  
童 ら の 水 掬 ひ を り 西 行 忌  
は ら か ら の 来 る た び 減 つ て 初 燕  
げ ん を 恋 ふ 蕪 村 に 雪 の 与 謝 郡  
み は る か す 春 の 怒 濤 や 銀 次 の 忌



# 竹間集

同人作品



水温む

外川 玲子

春障子潮の匂ひの寒さあり  
三月へ流木うごく小櫃川  
日当たりて立春の山せりあがり  
ゆふぐれのもつとも白し梅の花  
水温む十指放てばゆるびけり  
ほのぼのと山火ののこる闇ひとつ  
黄梅の日溜り消えて人うごく

はるかな昔

山田 暢子

病棟の音消えてより大枯野  
逝く年のはるかな音へ耳ふたつ  
星のこゑ空に満たして年逝かす  
初鳥一番高き木を選び  
ちちははに恋の昔や福寿草  
波音のリズムとなりて春隣  
縁側に届く日差しや女正月

寒牡丹

門伝 史会

まづ印す子の帰国日や初暦  
片言の一つ通づる初笑ひ  
寒の水うす紫と思ひけり  
汐入りの池をめぐりて寒牡丹  
將軍の鴨場の跡や笹鳴けり  
家康日本最古の鉛筆の使ひし鉛筆日脚伸ぶ  
じやんけんを足でしてゐて春を待つ

「淡交」以後(四)

野沢しの武

遠野より返信のまだ夏燕  
中七に切れをおく句や花石榴  
図書館に用夏休一日目  
わが句載るけふ海の日の朝刊に  
こんなにも晴れ梅雨明けの槻の空  
みな大き地震青森・岩手沿岸地震あり経し山車やお通りに  
少年のひた打つ祭大太鼓

辛夷咲く

鈴木 石花

五十年の鍋に綴ぢ蓋大根炊く  
山茶花や記念館となるくらら邸  
笹子鳴く牛久城中風致地区  
夫と吾の微笑む表紙新曆  
シャンソンのライブに集ふ女正月  
辛夷の芽新曲暗譜繰返す  
「故郷の四季」歌ふ朝辛夷咲く

湯巫女

山路 紀子

つちくれの混じつてをりし雪だるま  
あわあわと虹たつ消防出初式  
内親王殿下の下校冬薔薇  
五線譜を刻む墓石や笹子鳴く  
地下鉄の下を地下鉄日脚伸ぶ  
佗助や大釜脇に湯巫女立つ  
朝拝の巫女の正座や淑気満つ

初雀

岩木 茂

初雀汝も文殊の智慧借りに  
神の世へ雪の橋立渡りけり  
白鳥へ真新な雪踏みにけり  
掌に残る雪の香初日記  
針千本けふべた風の日本海  
松過ぎの砂州に測量棒立てて  
水仙や小川は音を調べて

冬銀河

— 鈴木 石花

築山に続く敷石実千両  
同郷の若き板長節料理  
部屋毎の輪飾り常連客ばかり  
眼の前の山より昇る初日の出  
旅先の鶏鳴に覚むお元日  
趣味違ふ夫に距離おく冬座敷  
同窓の金婚過ぎし雪の宿  
若者の小屋に炭火の味噌饅頭  
山頭火牧水の路風花す  
単線の車輛込み合ふ冬帽子

# 山河集

同人作品



神蔵器選

出初式神南備山を濡らしけり  
大名葱火山灰の黒土圍ひけり

生田恵美子

神の鈴独りに鳴らし女正月  
たんぽぽの穂絮全き冬の川  
やじろべゑとなつて二月の畦渡る

裂織りに使ふ紬や笹子鳴く  
爪立ちて伝言板の雪払ふ

中村洋子

寒の水飲みて己れを正しうす  
一舟行く墨絵のごとし雪催  
日脚伸ぶ谷中五丁目鍼力店

枇杷の花谷戸の一石日和かな  
夢掬ふやうに若水てのひらに

安永圭子

永田耕衣の句読みて母訪ふ松の内

存へし母の一言鼓草

砂漠緑化運動

種仕込む粘土団子も春を待つ

寒椿四捨五入して卒寿かな  
床の間に清少納言福寿草

及川澄子

しじまなる隔雲亭の冬すみれ  
寒に入る神宮橋に献血車  
オブラートに散葉つつむ雪催

霏して地球がのぼる寒満月  
終散る男帯織る音の中

小林和子

臘梅や城趾七谷径通ふ  
人の名を思ひ出ださず滝凍る  
寒紅や神に仕へる髪束ね

◇特別作品◇(抄)

## 去年今年

上村 葉子

山茶花や代の替はりし家二軒  
大根を引きたる穴に雨たまり  
小春日や掌に印泥を温むる  
咳一つこぼし人影路地に消ゆ  
極月や坂東太郎たうたうと  
十ほどの姫柚子浮かぶ湯に沈み  
身の丈に生くるほかなし去年今年  
一杓の若水に身を浄めけり  
歳時記の開かれしまま四日かな  
打つほどにさみどり深む薺かな

# 風土独語／神蔵器



くれなゐの布一枚を春着とす

柿沼 盟子

この句の問題点は布一枚にある。一枚に仕上げられたロング・スカーフか、特別幅と長さのあるシヨールのようなものを・ドレスの上に左肩から身に巻き付け、ことに胸元に優美なドレープ（襷）を演出したものが、くれなゐの一角はきわだって明るく清らか、初春のよろこびに胸がおどる。

ところで、布一枚の民族衣装といえ、インドの婦人たちが日常着としているサリーが有名である。幅九十センチから百二十センチ、長さは四・五メートルからごく長いものになると十一メートルもある。布地は錦織物、絹織物、人絹織物等であるが、錦織物には上等の金巾かきんなど薄く柔らかい漂白した布が使われ、高級なものになると布の端に金銀糸で花模様や幾何学模様などの刺繍がほどこされているという。

日本の業者がサリーに目をつけないはずはない。本場のサリーの輸入、又はインドの会社と提携して、日本人にあったサリー風のものを作り出していることと思う。私は冒頭にロング・スカーフなどと書いてしまったが、作者の布一枚は多分日本風に仕立てられた本場の絹のサリーであろう。

出初式 神南備山を濡らしけり

生田恵美子

地名は具体的に強い実在感を持っている。しかし、それ自体、

詩ではない。人類が生まれ関わりを持つことによって歴史が生まれ、今日の人間のすることや思うことよって詩が生まれる。

私ははじめ「神南備山」を、奈良県明日香にある三諸山の異称か、同じ奈良県生駒郡斑鳩の、万葉集にも紅葉の名所と知られる神奈備山と思いこんでしまった。

ところで虫の知らせか、念のため作者に電話をして見たところ私とは違つて、この句の神南備山は作者の在所の津山市、津山駅の南口に近い山ということであった。

なお、神奈備川は神の鎮座する山、神社のある山ということとその性格をもった山、又は異称としても多くある。まして旧美作の地は古代からいち早くひらけ、神南備山のほど近くには弥生住居跡など今でも保存されている。そして何よりもこの津山の神南備山は日頃から親しみ、有形無形、作者の生活の中に在ることである。

近代的に装備された津山市の消防団は裾を流れる片井川の河原に集合し、出初式の最高潮、高く上がった放水はきらきらと日に輝き、美しい虹を生みながら神南備山を濡らしている。

買初やカードは暗証番号持つ

山本 浪子

申すまでもなく暗証番号は、キャッシュカードなどで、所有者以外の不正使用を防止するために、あらかじめカードに入力する番号である。そして銀行などでは暗証番号で入出金できることは当然のことだが、今日ではデパートやスーパーなどでも暗証番号で買物が出来る世の中になった。大変便利になって喜ぶべきことであるが、考えてみると数字が信用されて、人間は信用されない不思議な世の中である。しかも、その不思議なことに誰も気がついていないのが不思議である。(以下略)

# 風土集



## 神蔵 器選

半纏のラックはみ出す店の前 東京 柿沼 盟子

着ぶくれて手足短くなりにはけり  
風花や水面のぞけぬ街の川  
荒星や魔法の杖の避雷針  
くれなゐの布一枚を春着とす

拾ふ夢捨てる夢あり冬銀河 川崎 山本 浪子

鮫鱈の悟り切つたる面構へ  
古書店の背中合はせや冬帽子  
故郷の霜に焼けたる菜の届く  
買初やカードは暗証番号持つ

庭土に塩ひとつまみ飾り焚く 川崎 鈴木 庸子

罅の 入る 蘇民将 来 冬 早  
真直に意志通す児や水仙花  
雪沓に履き替へて行く父母の墓  
相撲部のある中学や笹子鳴く

細織る箴の二度打ち機始 榛原 菅原 末野

花びら餅つつむ風呂敷ゆるく結ふ  
括らるる破魔矢の金の俵かな  
名刹の椀も小ぶりやなづな粥  
風邪心地笛吹く薬缶鳴かせゐて

桂郎の三寒波郷の四温かな 川崎 豎山 道助

心にも崖あり崖の水仙花  
新宿に娼婦と聴きし除夜の鐘  
冬うらら携帯電話すれ違ふ  
碑に誤字の悴む廃寺かな

資料とりに二階へあがる寒さかな 川崎 遠藤道遙子

煤逃げや泳ぎ納めの一〇〇〇米  
指揮者なり女性巡査の手袋舞ふ  
眼の奥の乾く日なりき冬薔薇  
一盞や成人の日の大学生